

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation

ドキュメンテーション

知られざる大学教員の生活

—狂瀾怒涛の夏休み編



本学科教授 堀川 貴司

Takashi Horikawa

をしました。いろいろな分野の人との交流から、新たな知識や見方を得ることが出来ますし、研究発表をすると自分の考えを整理し、深めるのに役立ちます。

*論文執筆

これだけあちこち飛び回っていると、落ち着いてじっくり考える時間が取れないのですが、それでも何とか書いたものがいくつかあります。タイトルだけ挙げると、「こぼれ咲きの花々—禅林ゆかりの小作品群」「日本中世禅林における三体詩の受容—二つの注をめぐって—」「瀟湘八景図と和歌」「森大狂旧蔵 本朝禅林撰述書目 翻刻と解題」「一休宗純『自戒集』試論」といったところ。もともとの専門である日本漢文学（主に中世の五山文学と呼ばれる禅僧の作品）と、この学科で教える書誌学とがミックスしたような論文が多くなっています。

*その他

筑摩書房の高校教科書『古典』『精選古典』のうち、漢文について、山形大学の先生と分担で執筆しています。また、本学の司書補講習で古典籍について講義したり、オープンキャンパスで模擬授業をしたりしました。京都の寺町通りや東京の神保町にある古本屋で手頃な値段の古典籍を買いました。掘り出し物は京都の方が多いような気がします。

スケジュールに追われた2ヶ月でしたが、この夏に得たさまざまな知識を、授業を通じてみなさんに伝えていきたいと思っています。手に入れた古典籍も授業で紹介していきます。

「ねえ、大学の先生って、授業がないときは何してんの？」——はい、いい質問です。2ヶ月も夏休みがあって、うらやましいと思われるかもしれませんが、でも、案外忙しいものなのです。集中講義をしたり、海外の学会に出かけて研究発表をしたり、後期から始まる授業の準備をしたり、といった先生もいます。私の場合どんなことをしたか、簡単に紹介してみましょう。

*古典籍の調査

ずいぶんあちこち行きました。町田市立国際版画美術館（東京、日帰り）、建仁寺両足院（京都、3泊）、静嘉堂文庫（東京、日帰り）、西尾市岩瀬文庫（愛知、1泊）、瑞光寺（京都深草、2泊）、熊本大学附属図書館（熊本、3泊）、お茶の水図書館（東京、日帰り）、ハーバード大学イェンチン図書館・フォッグ美術館（アメリカ、6泊）、コロンビア大学東アジア図書館（アメリカ、7泊）といったところ。大勢の研究者との共同調査もあれば、専門の近い人との少人数での調査、あるいは自分の研究論文のための個人的な調査もあります。旅費・滞在費は、科学研究費補助金（科研費）というものでほとんどまかっています。

*研究会

20年ぐらい続いている江戸時代の漢詩の研究会（法政大学）、数年前から始めた中世の絵画と文学に関する研究会（立命館大学）、江戸時代の出版に関する研究会（国文学研究資料館）、今年から始まった中世における中国文学の受容に関する研究会（早稲田大学）などに出ました。また、京都大学で行なっている東アジアにおける文化交流に関する研究プロジェクトに招かれて研究発表

教員から

学生の声

BOOK REVIEW

職人から学ぶ

活動報告

学生の声

— 現在の私・将来の夢 —

教員から
学生の声
BOOK REVIEW
職人から学ぶ
活動報告



将来の自分について

石渡 明男 (2年)
Akio Ishiwatari

「将来の夢は？」と聞かれたら、幼い頃の私ならプロ野球選手と平気な顔をして答えられました。時が経ち、今、私に同じ質問をされたら答えることができないでしょう。なぜなら、「夢がない」からです。小・中・高と硬式野球をやってきた私は、体格・才能には恵まれず、幼い頃の夢はあきらめました。追いつける自信がなかったからです。

しかし、大学に進学してもなお、硬式野球を続けています。これからも、続けていくつもりです。それは、野球が好きだからに他なりません。

幼い頃、父親にキャッチボールの相手をしてもらったり、練習や試合の日には母親は弁当を持たせてくれました。そんな思い出深い野球は、急には捨てられません。ですが、このまま社会に出ても、おいてかれるのも目にみえています。

今、教職課程をとっている私は、なんとか教員免許を取得し、教壇に立てるようになりたいな、と思い始めています。ですが、それには、やらなくてはいけない課題が山ほどあります。

ドキュメンテーション学科に入っているとはいえ私のパソコン技術は、まだ素人そのものです。知識も、最近の小学生の方が知っているかもしれません。今のままの私が、教師になったとしても、生徒に何を学ばせることができるのでしょうか？ それでも、必要とされる技術、知識を身につけ、教員免許を取ることを目指す気持ちに変わりはありません。これからは、野球部と勉強の両立を心掛け精一杯頑張ろうと思います。

近年では、教職につくのは難しいとされていて、神奈川県ではほとんど空きがないとも言われています。県内で教職につけない場合は、地方も覚悟していこうと思っています。

それでも、3年になり、デジタルドキュメンテーションコースへ進んで、いろいろなことを教わり、得た知識や技術を活かせる企業への就職にも興味湧いてくるかもしれません。その時は、できるだけ柔軟に考えようとも思っています。

とにかく、まずは親元を離れ自立したい！ そして、親孝行をしたい！ それが今の私の目標であり夢であるかもしれません。

BOOK REVIEW

情報教育学研究会・情報倫理教育研究グループ編
『インターネットの光と影 Ver. 2』(北大路書房、2003年)



電子メール、情報検索、オンラインショッピングなど、インターネットの利便性は私たちの生活を豊かにしています。しかし、インターネットには匿名性などの危険性も潜んでいます。本書ではインターネットの「光」の部分と「影」の部分、高校生や大学生向けに、イラストを交えて非常にわかりやすく解説しています。①「http://」と「https://」、②「To:」と「Cc:」と「Bcc:」、③「B to B」と「B to C」と「C to C」の違いを知らない人は、ぜひ本書を読み、情報倫理を理解してインターネットを安全に活用してください。(原田 智子) *鶴見大学図書館購入予定

大学4年間の証

木下 真宏（2年）
Masahiro Kinoshita



2年生になって、1年生の時より格段にパソコンを使った授業が難しくなりました。1年の時は友人たちと話をしながらでも楽々についていけたのに、今年は必死にやらないとついていけません。自分では、パソコンの知識や技術にかんして、ドキュメンテーション学科の水準の力は持っていると思っていたので、面をくらってしまいました。自分の余裕の無さに腹が立ってきます。そしてだんだん周りの人がどれくらいできているか気になって、それでまたそんなことを気にしている自分に不満を覚えるようになりました。

これまでなら限界が来ると開き直って、別のことに集中しようとしてきたけれど、大学に入ってから、家との行き帰りの電車の中でテキストのわからなかった部分を読み返したりするようになりました。電車の中で暇を持って余しているということもあるけれど、暇があるから復習をしようとするなんて、高校生だった頃の自分からは全く想像もつかなかったことです。

今はまだ授業についていだけで精一杯ですが、3年になってコース分けをする頃には、授業の内容よりももっとと深いことができるようになっていて、デジタルドキュメンテーションコースに進みたいと思います。そして卒業する時までには、例えばシステムアドミニストレーターなどの社会に出た時に武器となる資格を取ってほしいとも思います。就職に役立つからというのももちろん資格取得を目指す大きな理由の一つですが、それ以上にこれからのおよそ2年半の間、パソコンの勉強を続けていくからには、頑張るための目標の一つを設定しておきたいのです。それには、ありきたりなことかもしれませんが、資格の取得という目標が具体的、目に見えるハードルになると考えます。逃げ道を作らず、確かに資格取得というハードルを乗り越え、4年間の大学生生活の証にしたいと思います。

☀ 私の夏休み

カンパイ

橋本安菜（2年）

いつも見ているだけだったお酒を、今年の夏、ようやく飲むことが許された。

母がおもむろに冷蔵庫から取り出したのは大きめの缶で、カクテルのグラスが表面に描かれていた。母は、自分と私のために氷の入った小さめのグラスを二つだけ取り出した。父は缶からそのまま飲むのだ。いつもは父と母だけで飲んでいた中に、その日は私が加わって、二人の飲み分は減ってしまったというのに、どこか嬉しそうに見えた。

初めて飲んだお酒は、私に合わせてくれたのか、甘く、しかし飲んだ後は喉がヒリヒリと痺れて、それが酒なのだということを示していた。

少し眉を寄せて飲んでいて私を妹がじっと見ている。私は少し意地悪な目をしてニヤリと笑って、グラスに残ったお酒を一気に飲み干した。



大学生活と一人暮らしと



細矢 真美（1年）
Mami Hosoya

半年前の4月、ドキドキと緊張して迎えた入学式では、うれしさと同時に少しの不安がありました。皆さんの中にも身に覚えがある人もいます。そんな不安の中から始まった大学生活は、今では楽しく、充実した毎日を送っています。

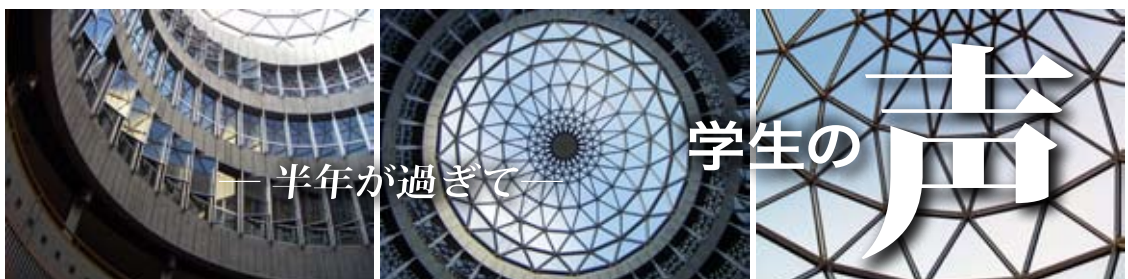
大学が始まってまず履修申告がありました。右も左も分からない状態で時間の調整・単位数を考えながらやるため、かなり大変な作業でした。また、自分の取りたい授業は他の授業と重なってしまったりして、どれを優先すべきかなどの調整とかも苦労しました。しかし、履修登録を終え、用紙を見返してみると、単位数や時間割の組み方が上手くいっていたのでホッとしました。

その後講義が始まり、入学の時に感じていた不安は的中しました。「大学の講義はどんなものか想像もつかなく、また講義について行けるのか」と不安だったのです。思っていた以上に講義の内容が深く、なかなか理解できませんでした。講義の中で、身近に感じられることは理解するのに時間はかかりませんでしたが、パソコンの専門的用語が出てくるような講義には苦労しました。この学科に入るまでのパソコンの知識はゼロに近いもので、普段はインターネットでショッピングをする時や、ちょっと文章を作るときなどにワードを使うくらいでした。エクセルさえ、使ったことが無いくらいでした。そんな人間に専門的な用語で説明されても、すぐには理解できませんでした。しかし、何回か講義を聞いているうちに自分なりに納得できるようになりました。それでも、分からないことが多いので友人に聞いたり、インターネットで調べたりして補っていました。友人がパソコンの用語集を貸してくれたので、後期からはそれも使って補っていきたいと思っています。

また、パソコンの他にこの学科でメインとなるものは、司書に関する勉強です。司書に関する講義も奥が深いものでしたが、パソコンよりも身近に関することが多く、ずっと容易に受け入れることができました。授業では、分類・情報・目録などについての仕組みについて教わりました。そして後期で受講している“データベース概論”は、今とても興味のある講義です。なぜかと言いますと、私は今一人暮らしをしていて本は少ないのですが、実家に帰郷すると沢山の本があります。ずいぶん古い本もあって、中には貴重なものもあるようです。ですから、それらの本を整理し、データベースを作りたいと思っています。

私は一人暮らしをしていて、洗濯・掃除・食事の支度などの家事全般は、もちろん自分自身でやります。恥ずかしい話、今までは全て祖母や母にまかせっきりで、極たまに手伝うだけでした。それをすべて自分でやるとなると大変でした。時間との戦いで、暇を見つけては直ぐに洗濯や掃除をし、今までは黙っていても出てきた食事も、早く食べたいのを我慢し、一から作ります。また、バイトや部活から帰ると疲れて寝てしまい、家の事ができないことも度々です。しかし、母は仕事をしているのに関わらずちゃんとこなしていたので、母を見習って、なんとか頑張っていきたいと思っています。

教員から
学生の声
BOOK REVIEW
職人から学ぶ
活動報告





豊田 真央（1年）
Mao Toyoda

不安の魔法は解けて

毎日授業、部活、イベントなどを黙々とこなしていたら、いつの間にか半年という月日が経っていました。たった半年ですがとても濃い半年でした。

私は最初、鶴見大学の生活に対して不安以外に何もありませんでした。友達はあるか、授業にはついていけるのか…。最初の頃、長い長い通学時間ではそのことばかり考え、私の不安な気持ちはどんどん積み上がっていきました。その時は学校がとても辛かったです。

しかし、入学してしばらくすると魔法が解けたかのように不安は消えていきました。多分それは入部した基礎体力増進会という部活の存在がとても大きいと思います。優しい先輩や友達、皆の楽しそうな笑い声…自分の中で半年前も、半年経った今も安らげる場です。毎週2回、バドミントンやバレーなどのいろいろなスポーツをして、楽しむのと同時にストレス発散しています。夏休みには夏合宿がありました。普段は体育館での活動ですが、合宿は外でスポーツを行いました。だから普段は出来ないサッカー、ソフト、テニスの3つの種目をする事が出来ました。夜には皆でわいわい騒いでとても楽しい3泊4日でした。この夏合宿で、より信頼が深まったと思います。普段の生活ではご飯を食べに行ったりして仲が良く、この部活で知り合った人はかけがえのない存在です。今は学費を貯める為にアルバイト優先になってしまってなかなか行けていませんが、本当に大好きな部活です。この部活は私にとって宝物です。

部活のお陰で気持ちや学校生活にゆとりが出ました。だから不安要素の一つだった授業も、もうすっかり慣れました。ドキュメンテーション学科の一番の目玉であるパソコンの授業は、初心者なのでまだまだ分からないことだらけです。でも最初の何も分からなかった頃と比べると、授業でゆっくり分かりやすく先生方が指導してくださるので、パソコンに対する知識が増えて、少しずつですが進歩している気がします。

これから将来に向けて勉強が大変になっていくと思います。とくに2年生になったらライブラリーアーカイブコースとデジタルドキュメンテーションコースの2つのコースに別れてより詳しい勉強をするので、慣れないうちは苦労するでしょう。私は司書になりたいのでライブラリーアーカイブコースに進んで頑張りたいです。大変そうですが将来のためだと思うと今からわくわくします。私は大変なことや辛いことをいかに楽しく変えていくかを考えるのが大好きです。だからきっと、あと3年半の勉強も楽しくやっていくと思います。

これから将来のため、そして充実した大学生活を送るためにいろいろなことに挑戦していきたいです。

☀ 私の夏休み

盂蘭盆斥候

大沢悠一（2年）



明確な日付は覚えていないが、8月の盂蘭盆にむけての下準備として、墓の除草作業をしてくれと祖父に頼まれたので、身支度を整えた。大型ゴーグルにマスク、タオルを頭に巻き、手には軍手というは目から見れば怪しく思われる防備をし、軽トラックの荷台に除草剤がたっぷりに入った旧式の重いタンクと共に乗り込んだ。

作業はまだ暑くはならない午前中に執り行うはずだったが、その日は午前中から炎天で、さらに重いタンクと重装備のせいで汗が滝のように流れた。ゴーグル越しに見える墓石は輪郭がぼやけるほどであった。墓地の中は入り組んでおり、入り口から我が家の墓までの道行きだけで膝が笑うほどだった。連日の暑さのせいで、地面は乾いており、しばらくは除草剤を散布してもすぐに土に染み込んでしまった。

そんな状況にもめげずに散布しつづけた甲斐があって、後日訪れた時には、雑草の海原に浮かぶ孤島のような墓は、もとの墓としての墓に戻っていた。

A	
C	B

修復 *restoration* ⇒ 保存 *conservation* ⇒ デジタル化 *digitization*

貴重書の修復・保存・デジタル化に携わる機関の見学会を、9月12日と13日に行いました。参加者は、勝又美保、小出和佳奈、関根敦子、目野吉美（以上1年）、北村雅美、佐田友視、田中紘子、鶴田綾子、若林由縁（以上2年）、堀川貴司、大矢一志（以上本学科教員）の11名でした。

12日午前中は、有限会社資料保存器材を訪問し、アーカイバル容器の制作、傷んだ古典籍の洗浄・脱酸・修復の行程、それらの実物を見学しました。午後は、国立公文書館を訪問し、裏打ち、リーフキャスト機、脱酸性化の機器、マイクロ撮影などを見学しました。13日は、株式会社マイクロサービスセンターを訪問し、マイクロ撮影実習、アパーチャカードの作成、スキャニングの実習を行いました。

学生は、実物の存在感や、修復後の変わりよう、そして現場のもつ迫りに圧倒されていたようです。内容は多かったですが、今回の経験はもう少し時間が経てばきっとよく消化され、2年後の卒業論文や就職活動の際に大きな財産となるでしょう。

今回の見学会は、情報保存研究会の金澤勇二様の調整で実現しました。また訪問先の皆様にも丁寧な解説や準備など、多くのご配慮を頂きました。ここに改めて感謝致します。（大矢 一志）

教員から
学生の声
BOOK REVIEW
職人から学ぶ
活動報告

見学会初日の午前は、有限会社資料保存器材の見学では、資料を長期保存するための容器を作ったり、新聞・ポスターなどの紙媒体記録資料の修復を行っていました。保存容器は、資料の大きさに合わせて作り、一つだけの注文も受けているそうです。大きさを資料に合わせるというのが、資料を大切に考えている表れだと思いました。実際に修復した新聞を見せてもらいましたが、前の状態から考えられないほど整った状態になっていました。ここまで修復できるのかと思ったほどです。

午後の国立公文書館では、公文書などを展示・閲覧するだけではなく、修復作業も行っていました。日本伝統の修復作業では、手作業で細かい作業を行っていました。しかし、その作業を行うことで、資料を昔の状態に近い形で残しておくことができるのです。他にもマイクロフィルム化も行っていて、撮影を見学しました。ただ撮るだけではなく、資料を傷つけないように注意しなければならないという話を聞いて、見ていて私も緊張してきました。現在では、マイクロフィルム化も進んでいますが、やはり、資料そのものを残していくということが大切なことだと思いました。

2日目は、マイクロサービスセンターを見学しました。ここでは、自分の持ってきた資料を実際に撮影したり、撮影したものをパソコンで処理するといった作業を体験しました。初めに撮らせてもらったとき、資料を挟んでいたものが動いてしまい、うまく撮れませんでした。実際の撮影機械を使ってということもありましたが、自分の資料だとしても、資料を保存するという作業に、とても緊張しました。実際にマイクロフィルム化を試みましたが、パソコンでしか見ることができないというわけではなく、カードになっていて、余白部分にインデックスを記入して保存することもできます。デジタル化といっても、パソコンがすべてではないのだと知りました。前日に見た日本伝統の修復・保存とはまた違った保存であり、しかし、どちらも必要な保存だと思いました。

今回の2日間の見学を終えて、図書館で資料を管理することだけが保存ではないのだと知りまし



緊張した見学会

勝又美保（1年）
Miho Katsumata

た。図書館の仕事だけではなく、修復・保存の仕事にも興味がわきました。今まであまり考えたことはありませんでしたが、今ある資料をどう後世に残していくかということ、考えさせられました。



見学会1日目の午前は、有限会社資料保存器材にて、ミシンの取扱説明書の修復の前後を見せていただきました。修復前はかなり古い上に油まみれで開くこともできず、無理に開こうものなら破れたり文字のインクが向かいのページに写り、読めなくなってしまいそうな厄介なものでしたが、薬品に浸し油を抜くと、文字は消えずに再び捲って読めるようにまでなるのです。なぜ文字が消えないのか不思議でした。

午後の国立公文書館での紙資料や公文書の修復の見学で一番驚いたのは、リーフキャストという機械を使った修復です。繊維を溶かした液体に虫に食われたり、欠損した資料を浸し引き上げると、繊維が穴に集中し埋まるという仕組みです。修復というより、新しい紙として作り直してしまうと言った方が近い気がしました。手作業より簡単で、洗浄も同時にでき、水に浸けるとまた欠損したもとの状態に戻すことも可能です。小学生の頃に広告紙などを使って自分の好きな色や形のはがきやメッセージカードを簡単に作った「紙コロジー」を思い出しました。

意外だったのは、修復には水が重要視されていることと、完全再現するのではなく、もとの虫食いや破損の形がわかるように、あえて和紙の色を少し変えたりして修復するということです。保存のためだけでなく、現状をそのまま残すことも大切にしているのだと感じました。

2日目のマイクロサービスセンターでは、マイクロ資料に関する説明を聞きつつ実習を行いました。

まずは各自が持参したお気に入りのポストカードや写真などを、大きな専用カメラでロールフィルムに撮影しました。ロールフィルムは、撮影に失敗してもその部分だけを切り取って継ぎ足すことはできず、ロール1本丸ごと無駄になってしまうと前期の講義で教わっていました。実際の保存資料の撮影では、携帯電話のカメラ機能やデジタルカメラといった取り直しが利くものと違い、必要以上に気を使うのではないのでしょうか。

現像して出来上がってきたのは白黒反転したロールフィルムで、私の撮影した、満月の光が映る夜の海のポストカードはどこか不気味でした。そのフィルムを1コマずつ切り、台紙（アパーチュアカード）に専用の機械で貼り付きました。それからデジタル化するために、そのカードをスキャナで取り込み、コントラストの調整などをしました。夜の海の画像のコントラスト調整はとても難しかったです。実習で作成したアパーチュアカードは記念とお土産になりました。

軽い気持ちで参加しましたが、とても得るものが多く、貴重な体験をさせていただきました。そしてなによりも親切な方ばかりで楽しく充実した2日間でした。

見学会に参加して

田中 紘子（2年）
Hiroko Tanaka



平成 17 (2005) 年度 7 月 -10 月

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

教員から
学生の声
BOOK REVIEW
職人から学ぶ
活動報告

7月2日(土)

ドキュメンテーション学科教育懇談会開催

父母会総会后、父母の方と教員との教育懇談会が開催されました。各教員から学科での教育の現状を説明した後、率直な質疑応答がなされました。さらに、各クラス担任の教員との個別の相談も行われました。

7月12日(火)

ドキュメンテーション学会総会開催

16年度の事業報告と今年度の事業計画が検討されました。併せて学生委員が改選され、次の13名に決まりました。

鱒坂圭司、大沢悠一、佐田友視、長塩諒子、野村昭博、若林由縁(以上2年) 浅谷紘太、大胡昌子、熊谷純貴、田中敦子、豊部祥子、真鍋智史、森麻祐子(以上1年)

7月27日(水)

1・2年生交流会

前期試験最終日に1・2年生の交流会を行いました。日頃は別々に授業を受けていて、あまり話す機会がありませんが、自己紹介の後は、楽しく歓談し、授業に関する情報交換などもなされたようです。



※活動報告の詳細は学科ホームページ (<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/>) でご覧になれます。

8月27日(土)

司書・司書補夏期講習共催

第2回 鶴見大学デジタルライブラリー国際セミナー開催

デジタルライブラリーの分野で精力的な活動をされている Lim Ee Peng 準教授(シンガポール・ナンヤン工科大学、写真右)を招き、セミナーを開催。講演「学習へのデジタルライブラリーの活用：G-ポータル経験」の後、活発な質疑応答がなされました。



8月14日(日)～8月18日(木)

原田智子教授・長塚隆教授、「世界図書館情報会議：第71回IFLAオスロ大会」で発表

IFLA年次大会で、原田教授、長塚教授が、「鶴見大学司書課程受講生へのe-ラーニングの新たな試み」の内容で発表。本会議は、世界の図書館関係者にとって重要な会議で、今年度は133カ国から約3千名の図書館員や図書館情報学の研究者等が集まりました。

8月27日(土)～9月11日(日)

堀川貴司教授、米国へ古典籍調査に

堀川教授が、米国ハーバード大学イエンチン(燕京)図書館、同大学附属のフォッグ美術館、コロンビア大学東アジア図書館にて、漢籍や日本古典籍の調査をしました。

■ 第3号は06年5月末日発行の予定です。掲載原稿・写真を募集しています。

■ 編集委員

[学生] 阿瀬正裕^{2年}・北村雅美^{1年}・真鍋智史^{1年}・大胡昌子
[教員] 長塚 隆・伊倉史人

■ 写真協力：豊部祥子^{1年}(前号に引き続き感謝します)

ドキュメンテーション 第2号

平成17(2005)年10月30日(金)

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見2-1-3(〒230-8501)

☎045(581)1001(代表) 発行責任者：岡田 靖

<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/>